

自然

田の中の一筋のみち

郡山市から鳳坂峠ほうさかとうげを超えて会津若松市へ通じる道があり、通称長沼街道と呼ばれている。戦時中、我が家はこの街道の途中にある八幡村やはたむらに疎開した。郡山市のわが家からは十二キロほど離れている。当時、国民学校一年生の私は、母と一緒に何度もこの道を歩いて往復した。母はあるとき疎開先に私を置いてこの間を二度も往復した。疎開といっても、生活に必要なものはすべて背負って運んだのだ。この道は七歳になつたばかりの私にとっては、懐かしい道と言うより疲労と空腹の道という印象が強い。

私もようやく仕事を離れ、気ままな時間が持てるようになつた。季節は良し、小さなりックにおにぎりとお茶を詰め、目的地の八幡神社めざして歩き始めた。この街道は、途中新しく出来た舗装道路が数本横切つている以外、私の覚えている道筋とほとんど変わつていなかつた。あの頃と違つていると言えば、凸凹の砂利道がすべて舗装道路になつていたことぐらいだろうか。途中、太く大きな一本松もあるべきところに、当時のままのつしと座つていた。この松は、「万歳松」といわれ往来する人々の目安になり、休憩場所にもなつ

ていた。

約二時間近くかけて到着した八幡神社の境内は、子どもの頃には迷つてしまいそうな広さであつたが、今佇んでみるとこじんまりとしていて村の鎮守様そのものであつた。終戦の時に、詔勅で集まつた大人たちが悔しさや哀しみの涙を流した社やしろである。境内には難しい言葉で神社の由来などが書かれてあつたが、私の下半身の疲れはともかく帰路を急がせてた。愚かにも、私はかつて社の北を流れる鮒や鯰を釣った流れを確認しないまま帰路についた。疲労は、翌日から三日間、二階への手すりを必要とするものであつた。子どもならば一晩眠れば回復する疲れもそう簡単には抜けない。年齢とは正直なものである。しかし、あの東西南北に広がる田園の風景は、思い出の堀り起しもさることながら、全身疲労と引き換えにしても価値があつた。

疎開先はS家といつたが、一家六人が寝泊まりする場所は何と馬小屋の二階であつた。家主は農業の傍ら馬車で荷物を運ぶ仕事をしていたのである。したがつて馬を大切にし、馬の寝場所を移すようなことはしなかつた。馬小屋といえばイエス・キリストが連想されるが、姉の長女（私にとつては姪）は、作り話ではなくこの馬小屋

の二階で生まれるというおまけまで付くことになつた。ついでながら、この姪は成長してもキリスト様にもマリア様にもなることはなかつた。でも、戦後まで一家が無事で居られたのは彼女のお陰だつたのかも知れない。

話を前に戻そう。私はこれに懲りて歩行を諦めマウンテンバイクを手に入れた。風雨の日以外はこのコースを日課とするようになつたのである。流石に冬季は遠慮したが、春、夏、秋と移り変わる風景は、一人で味わうには勿体ないほどの景色である。あるとき、田の中を一直線に西に向かう舗装されたあぜ道を見つけた。自動車は無論、人もほとんど通らない。贅沢にも私の専用道路のようなものなのだ。

春、微風、それまでの黒土は耕され、水の張られた田んぼは、鏡となり、奥羽の山脈の向こうに残雪の磐梯山が頂を覗かせ、逆さ額縁にして見せてくれる。

初夏、薰風、弱々しかつた早苗はすっかり存在感を増し、空に向かつて青葉をぐいと伸ばし、根元にはおたまじやくしやザリガニを遊ばせている。

秋、錦風、実った稲穂はいつの間にか刈り取られ、土肌がまた現

にしきかぜ

れる。この一本の道の向こうには、衣替えした山々が、指呼に近づき、これが自然の推移というものだつたのだと気づかされる。

待てよ、「これは自然以前の景なのかも知れない」日本の古典文には「自然」という言葉が全く出てこない。「自然」は漢語だからであろう。もともと農耕には「自然」という語はなじまない。農作物はどうしても人の手と天候という神の助けが必要なのだ。現在は殆んど使われなくなつたが「かんながら隨神」や「とぱりかみ惟神」の語は要約すれば、人間の努力に加えて神の手助けが必要だという日月帰順の心が加わつていたと思われる。

なるほど、我々日本人は四季と一体となつて暮らして來たので「自然」という言葉を必要としなかつたのである。自転車でゆっくりと走る田の中の一本道は、いろいろなものを見せ、教え、考えさせてくれる。先人は四季の移ろいという形で、ゆかしい景を現代に残してくれたのかも知れない。

今年平成二十四年の八十八夜は、太陽暦五月一日であつた。昨年は原発事故の影響でこの地でも耕作しない田畠があつたが、今年は一面にさみどりが広がつていて、日本の初夏らしい風景が見られた。

日本の初夏はさみどりが一番似合う。